

「命を守り、みんなが安心して暮らせる防災教育の推進」

令和3年度 高知県学校安全総合支援事業（災害安全）

大月町教育委員会 拠点校 大月町立大月中学校

1 事業の目標

（1）モデル地域の現状及び安全上の課題

大月町は、太平洋と豊後水道に面したリアス式海岸に沿うような漁業集落と山間部の集落とがある。南海トラフ地震が発生した場合には、海岸線の集落のほとんどが津波の被害を受けると考えられている。その中で大月中学校及び大月小学校は発災時の避難場所にも指定されており、拠点校である大月中学校において、先進的・実践的な防災教育を研究していく。

（2）モデル地域の事業目標

本事業を通して「自分の生命は自分で守る」を基本に、必要な知識・技能・行動の習得を主眼に置いて、年3回以上の小中合同防災活動を行うとともに、防災授業を年5時間以上実施し、児童生徒が将来、地域リーダーとなり主導的行動がとれるよう防災教育に努め、児童生徒及び地域の人々が自ら命を守れるよう地域へ情報発信ができる体制を整える。拠点校である大月中学校は町の中心部の高台に位置しており、災害時には避難所となる。また大月小学校が隣接しており、連携をしながら防災訓練等9年間を通じた取組を推進している。さらに令和2年度に町内の保育所が統合しおおつき保育所も開所され、さらに連携の輪を広げることが重要になる。

2 モデル地域の取組の概要

（1）安全教育の充実に関する取組

ア 安全教育の充実に関する取組

中学校においては、日々過去の災害を振り返るため「防災アーカイブ」放送の実施、昨年に引き続いてフィールドワークによる「防災危険箇所（ハザードマップ）の作成や昨年度の調査を基にした「防災新聞づくり」、避難所運営を想定とした「ハグHUG訓練」の実施などに取り組んできた。特に今年度は防災について学ぶから、伝えることに重点を置き、防災士による保育所・小中学校での防災活動や町内全戸配布される広報へ防災シリーズの記事を掲載、また地域避難訓練へ地元の中学生が参加するなど防災に対し自分で何ができるのかを常に考え、活動を行ってきた。

小学校においても、中学校との地震を想定した合同避難訓練や放課後、遠足時の避難訓練、火災を想定した避難訓練、防災授業の実施、起震車体験などあらゆる想定の中の訓練を継続して行うことで、いざという時の迅速な行動、的確な判断、防災への危機意識につながっている。

イ 安全教育の取組を評価する・検証するための方法について

防災公開授業や1年生防災マップ学習発表会の開催を通じて、体験学習サイクルでの気づきや成果品については見える化することによって意識づけにもつながった。

（2）組織的取組による安全管理の充実に関する取組

小学校では放課後子ども教室を開催しており、放課後の避難訓練時には支援員と連携し、避難誘導を行った。防災マップやフィールドワークでは、地区への協力依頼、県防災砂防課の講師招聘により、現地での専門的で興味深い講話を聞くことができた。危機管理課や建設環境課との連携、自主防災組織との情報共有を図ることによって、町として本事業の取組が今後の更なる防災意識への波及効果が期待できた。

(3) 学校安全担当教員の資質向上に係る取組

事前学習の実施や、防災教育アドバイザーによる防災教育研修の参加により、地域特性に応じた深い資質を習得することができた。中心的な役割をもって本事業にも取り組み、関係機関との連携も図った。

(4) モデル地域全体への普及

隣接する小中学校の強みを生かして、合同避難訓練の実施。中学生防災士による保育所での防災絵本の読み聞かせや小学校での防災出前講座の実施など、保・小・中の防災意識を高める活動を行った。

3 拠点校の取組

(1) 拠点校の目標

- 自らの身を自分自身で守る能力の育成
 - ・災害時に自らの身を守る力
- 知識を備え、行動する能力の育成
 - ・地域の特性、防災に関する知識を活用し防災・減災のために事前に備え、行動できる力
- 地域の安全に貢献する能力の育成
 - ・大月町の自然環境や防災体制、災害の発生のしくみ等について理解し、地域の一員として防災・減災活動に取り組む力



(2) 安全教育の充実に関する取組

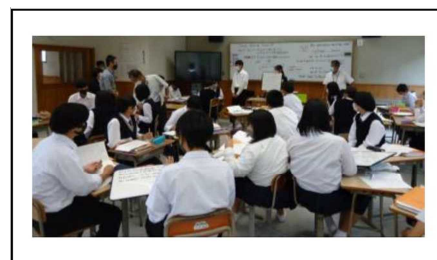
○避難訓練

学校安全担当教員が中心となり、各回振り返りを生かし、連絡体制、安全確保など細かいところを確認し、より安全性を高めていった。また、抜き打ちの訓練や消防署の協力を得て煙発生の中での避難、消火訓練も行い、対応力を高めた。小中合同避難訓練は、授業時だけでなく、放課後や昼休みの実施などを計画し、両校とも防災・避難について意識と対応力を高め合うことができた。



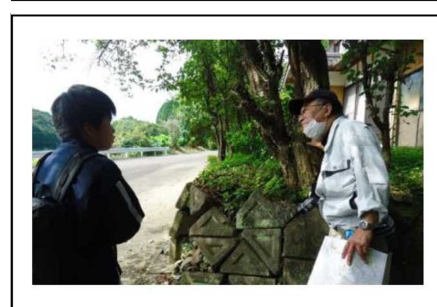
○体験的学習

1年生は、今年度も幡多青少年の家にて防災キャンプを実施した。災害時の行動や基礎知識、災害時のアルミ缶を使っての炊飯、簡易タープづくり、ロープワーク等、災害時に自分の力で行動できるよう、自ら考え知恵を出し合いながら学習することができた。



○防災に関する授業

「高知県安全教育プログラム」を活用した取組の他、校内研修に防災アドバイザーを講師に招聘し、学校防災教育の展開と防災マップづくりについての研修を行った。各教科でも防災に関する授業を行ったが、英語科では、今年度新たにALTが赴任することを受け、「南海トラフ地震が起こったときに備えALTの先生に必要な情報を伝えよう」という単元ゴールを設定し授業を行った。フィールドワークや次年度につなげるために講師を招き学習を行った。



1年生は、ハザードマップマップ（危険箇所）作成の学習を通して防災学習を行った。講師を招聘し、マップづくりのポイントやフィールドワークを行い過去の被害や危険箇所について調査を通して学習し、今年度は4地区のマップを作成した。フィールド



ワークでは、土木事務所、町教委、町危機管理室、地区長の協力をいただき学習が深まった。

2年生は、高知新聞社の方を講師に招聘し、新聞のつくり方の基礎を学習し、昨年度フィールドワークを行った3地区について、区長さんへの取材や町危機管理室の職員の授業などから、高齢者の方が安全に避難するために気をつけることなどその地区に特化した防災新聞を作成した。学習した内容については防災新聞としてまとめ、文化祭や防災研究大会を兼ねた参観日において保護者や地域に発表を行った。

3年生は、「地域貢献」を目標に、避難所運営・簡易作成防災キット、緊急時の対応、防災食などについて学習し、保護者や地域の方に伝えることができた。

○講師招聘

講師を招聘し教職員が研修を受け、防災学習の進め方を確認し取組をスタートした。その後も学年部会や全体で講話に来ていただく機会をとった。生徒に対しては、都市工学・地域防災や地震防災・地質学専門の大学の先生方に講演をしていただき、また、各学年の授業で多くの講師の先生方、関係機関の方々にお世話になり、効果的な学習ができた。



○防災士の活動

昨年度は生徒3名が防災士の資格を取得した。この防災士が学校の防災リーダーとして活躍した。先進高校の防災委員会との学習保育所や小学校への出前講座、県下一斉自主防災活動への参加、校内避難訓練等での講話など子どもたちにとって身近でわかりやすい内容が好評であった。また、防災士の活動や学校の取組を町広報誌に掲載してもらったことは防災についての啓発にもつながったのではないかと考える。今年度は現在のところ1名が資格を取得し、他の生徒は再度後期の試験に臨む予定である。



○地域との連携

防災の研究発表会を参観日と重ねたことで、多くの保護者の方に来ていただくことができた。1年生は別日に、大月町長さんをはじめ行政の方々や大月小3年生、地域の方をお招きして発表を行った。授業やフィールドワーク、アンケート調査などに、多くの関係機関や地域の方々に協力をいただいた。

地域の方々に役立てていただくべく、今年度作製した4地区と昨年度分の3地区の防災危険箇所マップを掲載した

防災カレンダーを3000部作成し町内全戸に配布した。



(3) 安全管理の充実に関する取組

○安全管理の確認

危機管理マニュアルや安全計画の見直し・共有を行い、避難訓練等では関係機関への連絡体制、校内の避難・連絡体制の確認を行った。危険個所の確認では、廊下に掲示していた歴代の表彰状の撤去、LL教室、PC教室への上履きを履いたままでの入室など非常時を想定して改善をした。また、防災・地質学の専門家の意見も踏まえ避難場所や避難時の危険物の再確認も行うことができた。



○県内一斉自主防災活動への参加

「子どもは未来の地域の担い手、子どもが動けば地域も動く」ということで、地区長さん町危機管理室の協力のもと、3地区の自主防災活動に子どもたちが参加した。

これまでの学習を生かし、避難訓練での講話や救急活動のモデル説明など地域の方にも好評であった。区長さんからは「中学生が防災訓練に参加してくれることで地域の防災意識が向上する」というお話をいただいた。自分が生活する場所で地域の人たちと避難・防災活動したことで、学校外での防災意識を現実的に意識するようになった生徒がいた。



(4) 成果と課題

<成果>

- ・南海トラフや大月町での地震による被害についての理解、地域の避難所・避難場所の把握、避難行動など知識としての理解が深まったと回答した生徒が増えた。
- ・昨年度の課題であった、地震発生時の安全行動（「地震が起きた時…登校中安全な場所に避難できる」「地震が起こったとき、外にいる場合、身の安全を守ることができる」）についても理解が進んでいる。

学習の結果、防災についての知識は深まっており、「地域でおこりうる被害」や「避難場所」を知っている。という生徒も多くなっている。また、「登校時に地震が起こった場合の避難」についても、認識が深まっている。

<課題>

- ・地震後「家族との連絡の取り方を決めている」「地震後、家族と集合する場所を決めている」「家で地震への備えができています」は全体的に低い傾向にあった。
- ・伸びてはいるが、行動する力について、「自分自身で身を守る」は全体的に見るとまだまだ力がついていない。

行動する力の育成には、安全教育プログラムの実施の他、体験的学習が重要になる。学校での授業はもちろんのこと、地域での活動への参加などにも広げていければと考える。

アンケートの数値が低い項目には、家庭での項目がいくつかある。学校から家庭への投げかけやお知らせ等を増やし、家庭との危機管理の共有も図っていかなければならない。

今までは、学校の防災学習に行政をはじめ関係機関に協力をいただいて取組を行ってきたが、大月町の行政側の防災の取組に関して学校側が行うべき取組や学習など、生徒が地域で生活し命を守ることができるよう連携の再考も必要である。

4 事業の成果と課題

2年間の取組を行う中で、災害について学ぶ姿勢から「地域の一員として、災害から大月を守るために自分たちにできること」をテーマに活動を行う姿勢へと変化し成長してきた。例えば、保育所・小学校への防災出前講座、広報による発信や地域の避難訓練への参加などの活動、特に講師への防災記事の連載や地域の避難訓練参加は地域の方々から喜ばれ、地域からも継続した参加と避難訓練時の防災講座の実施など要望も上がっている。

ただ、活動に当たっては関係機関と連携する中で、スムーズで効果的な活動を行うために、防災取組の目的と目標の共有を行うことの必要性と重大性を感じた。活動で得た知識をより具体的に地域へ返す仕組みが必要であり、避難訓練時の防災出前講座等へつなげ地域防災の意識向上を目指したい。

5 今後の取組の見通し

2年間の取り組みにより学校内での防災意識も高まっており、また地域から要望のある出前防災講座の実施のためにも、フィールドワークや防災士資格の取得、防災に関する情報発信など、今後も継続した活動を行っていく。